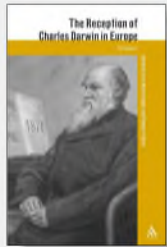


Eve-Marie Engels and Thomas F. Glick, eds.

*The Reception of Charles Darwin
in Europe, 2 vols.*



Charles Darwin 生誕 200 年記念として出版された書籍のなかで現在のところ特記すべきは、*The Reception of Charles Darwin in Europe* である。本書は The Athlone Critical Traditions Series: The Reception of British and Irish Authors in Europe (Ed. Elinor Shaffer) の一環として出版された。

IT (情報処理技術) は今日、驚くべき進展を比較文化の研究分野にもたらしている。作家・作品についてのデータベースがこれまでとは比較にならないほど豊富になり、広範かつ大量、迅速にデータを入手できるようになったからである。それは、作品の各版についての情報、翻訳、書評、宣伝と、伝記、手紙、研究論文から風刺作品に^{わた}互っている。このシリーズは大部分、イギリスの詩人や小説家たちを扱っているのであるが、理系の Newton と Darwin が特別に参加を許されている。もちろん、文系の文化への影響力が考慮されたためである。

Darwin は、学説を発表して、後はよろしくと読者の受容に任せるタイプの科学者ではなかった。イギリスのみならず、ヨーロッパに張り巡らされたネットワークを使い、専門家以外の人々とも頻繁に文通し、自説の修正と宣伝に努めたのである。そこで多くの資料を残した。今日、神格化されつつあるとさえ思われる Darwin の学説が如何にしてヨーロッパの文化的文脈に浸透したのか、あるいは拒絶されたのか、その実像を描き出そうというのが、本書の狙いである。

Darwin の学説は、漸進説、共通起源説、自然選択説の 3 つの学説を組み合わせたものである、という共通認識は早い時期に、イギリスのみならずドイツなどの国々に浸透していた。そのなかで「自然選択」説は、Darwin 自身が自らの独創として打ち出したものである。すなわち、生物の多産原則により、個体間に生き残りを賭けての競争が生じる。多様で微小でランダムな遺伝的変異のうち、より環境に適した変異を持った個体が自然によって選択され、その結果、その個体が勝ち残れる。その特性は子孫に遺伝する。このようにして膨大な時間を経るうちに新種が形成されていく。——しかし、変異がどのように起きて、どのように遺伝するかは明らかにされなかった。いわば学説そのものは開かれた形で停止しているのである。そのお陰で、ダーウィン進化論は多くの受容者を獲得することができた。

これまで多くの論者が、イギリスにおける Paley の自然神学や Spencer の進化哲学と Darwin 進化論との接点、および、フランスにおける Lamarck の獲得形質の遺伝説との違いを、また、ドイツにおいて Haeckel がいかに自分の進化論のなかに、さらにソ連がいかにマルクス主義のなかに、Darwin 進化

論を取り込もうとしたか等を論じてきた。また、Lord Kelvin の熱力学が一時 Darwin 進化論が仮定した地球年齢を否定したことも指摘されてきた。しかし、これらの研究は、現在の視点から見ると、一面的であることを免れてはいなかった。本書は、彼らの視野を驚くべき広さに拡大したのである。

本書は 29 章で構成されており、寄稿者は 39 人、ほとんどが科学史や文化史を専門にする学者である。上述の国々ばかりではなく、ヨーロッパ諸国をほとんど網羅している。各著者が、各々の国における Darwin 進化論の今日に至るまでの受容状況を報告し、各国の文化、政治、宗教と Darwin 進化論がどう絡んだかを明らかにしている。さらに Darwin 進化論は、自然科学の方法論を樹立した一方で、人文科学系、社会科学系の各学問分野において受容、拒絶、あるいは変容させられた。それが、どのような形で行われたのかが明らかにされている。

ドイツやフランスなどの Darwin 進化論理解をそのまま取り入れた国々も多かったが、3 本の柱となっている前述の学説は、それぞれ別個に受け止められることが多かった。また、伝播するうちに内容が変容したにもかかわらず、相変わらず Darwin 進化論と呼ばれる場合もあった。しかし、特筆すべきは、オーストリアの神父であった Mendel の遺伝学と Darwin 進化論との関係である。Darwin 進化論は低迷期を乗り越え 1930 年代に Mendel の遺伝理論と合体することにより、総合学説として生き残ったのである。Mendel の学説はそれまでは知られていなかった。彼が Darwin 進化論をどのように読んだか、2 人の学説がどのように合体されたのかが明らかにされている。これが本書の Darwin 進化論受容史への最大の貢献のひとつであろう。

ヨーロッパの人々にとって Darwin 進化論は、放っておけない問題である。宗教と政治がこれによって強い衝撃と影響を受けたからである。日本人は、断片的な知識として Darwin 進化論を摂取してきた。その知識と認識を磐石なものにしたい向きには本書は必読書である。(Continuum, 2008, 742pp., £200.00)

——清宮 倫子 (茨城キリスト教大学教授)